

津田ひろみ 著

『学習者の自律をめざす協働学習：中学校英語授業における実践と分析』

(ひつじ書房、2013年、A5版、385頁、6800円+税、上製本)

綾部保志

本書は、立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科の第一期生で、2011年3月に博士課程後期課程を修了した津田ひろみ氏による、博士学位論文をもとにした著作である。著者は、中学校を中心に、小学校、高等学校、短期大学で長年にわたって英語を教え、その後、9年間の大学院生活で、学習ストラテジー、動機づけ、メタ認知、協働学習、自律性など、英語教育の最先端のテーマに研究の射程を次々と広げ、現在は、明治大学国際日本学部を始め、複数の大学で講師として教鞭を執っている。本書は、津田氏のこれまでの教育実践と研究活動を凝縮した濃厚な「作品」に仕上がっており、まさに、異文化コミュニケーション研究科の理念である「理論と実践の架橋」を体現した「結晶」といえるだろう。

「協働学習」は「アクティブ・ラーニング」などと並んで、学習者の主体的な学びを促す指導法として注目されている。その意味で、本書は時流をとらえた本ではあるが、類書にみられるように現場ですぐに役立つ指導法を集めた「ハウツー本」や、表面的な流行を追う「解説本」とは一線を画しており、経験的事象の調査・記述と、理論的枠組みによる分析・解釈を施した専門書である。「協働学習」とはどのような特徴をもつ教授法で、いかなる社会史的文脈から生まれ、今、なぜ注目されているのか、それは学習者の英語力に加えて自律性を育成することに、どのように寄与するのか、そして、協働学習の場では一体何が行われているのか、これらの問いに対して著者は真摯に向き合い、一定の結論を見出している。言語習得が行われる「今ここ」の場での実践行為を正面から扱っているため、英語教育関係者だけでなく、分野を超えて幅広い人々にとって一読の価値がある。

では、本書の構成と内容を、順を追って記す。まず、第1章では、日本の英語教育界で学習プロセスを自己調整できるような「自律性」(autonomy)を育てることが志向されていること、その自律的態度には、自分の思考や行為をモニターする「メタ認知」(metacognition)が深く関わっていること、さらには、そのような意識を内化するために「方略」(strategy)を教えることが有効であることなどが詳しく論及されている。そして、以上を包括的に扱おうる教授法として、学習者間でのインタラクションをとおして、社会的視点までも養える「協働学習」の指導効果を検証することが研究の目的とされている。

つづく第2章では、上記の概念について、近年の先行研究が紹介され、協働学習の理論的根幹を成す「社会文化的アプローチ」が詳述されている。ここで著者は、学習が行われる状況、個々のコンテキスト、言語習得のプロセスを捨象／無視することなく、学習者を取り巻く社会文化的コンテキストを含み込んだ全体的な分析を行うことの重要性を唱えている。理論的枠組みとして、レフ・ヴィゴツキーの「発達の最近接領域」、ミハイル・バフチンの「対話」、パウロ・フレイレの「抑圧からの解放」の概念についてそれぞれ説明し、それらが生成した社会史的環境と絡めて、彼らの流派の特徴と思想を浮き彫りにしている。このように著者は、方法論の背景と限界を明瞭に認識した上で考察を進めている。

第3章では、それ以降の章の調査概要が述べられている。研究対象は、著者が勤務していた中学3年生の1年間の選択授業で、調査方法は、量的調査としてメタ認知に関する認識と方略の2種類の質問紙調査、それと並行する形で実施した英語運用能力テスト（GTEC）のデータ、生徒が使用したストラテジーに関する英語運用能力別グループの特徴と変化の統計分析である。また、量的調査ではわからない学習者の意識についての自由記述と回顧インタビューも実施している。そして、生徒同士の相互行為をコミュニケーション論的な分析で立体的に描き出すという、3段階の論証を経た「三角測量」が本書のリサーチ・デザインの骨格である。著者は、量的調査、質的調査、実態調査という多角的な分析によって、生徒たちの能力／意識変化、授業参加者たちの動態的な相互行為、および、それらに対する参加者たちの解釈、インタビューによって語られる出来事、これらに対する再解釈をとおして調査対象に迫ってゆく。巻末の補遺に収録された多くの資料（研究協力同意書、授業プリント、好感度調査用紙、回顧インタビューデータ、書き起こしデータなど）から、入念な計画に基づいて研究が行われたことが窺える。

第4章と第5章では、著者自身が言及しているように、調査協力者の数や質においてデータ収集の制約があるとはいえ、それらを補って余りある有益な調査結果が示されている。量的調査の結果から、協働学習の指導効果は、中位群に大きな英語運用能力の向上が認められたこと、英語学習全般に関するメタ認知については、上・中位群の学習者が、具体的な学習目標をもち、授業以外での積極的な取り組みがあるのに対して、下位群の学習者は、受身の姿勢が顕著にみられることが判明した。質的調査では、学習者の自律性の度合い（高／低）は（ミクロからマクロの）メタ認知の意識レベルと連動しており、「階層的なフレーム」の存在が同定された。したがって、学習者の意識を目の前にある低次なタスクレベルから、学習者同士の相互行為レベル、さらに、より広い外部世界へ視点を移動できるようにすることが、自律的な学習者を育成することにつながると思われる、そうした内的変化を引き起こすために「対話」が鍵となると結論づけられている。

第6章は、本書の核心部といってよい。協働学習の授業で実際に「為されていること」、つまり、コミュニケーション行為の過程、生起する出来事、実践自体の論考となっている。言語人類学の理論的基盤である「出来事モデル」に基づいて、フレーム、フッティング、レジスター、コード・スイッチング、ヘッジ、コンテキスト化の合図、隣接ペア、詩的機能などの分析ツールが使われて教室談話が具体的に検討されている。これらの十全な手続きによって明らかにされたことは、協働学習では「修正」「協力」「ふざけ」「質問／回答」「無視」などの多様な解釈のフレームが喚起され、生徒一人ひとりが「牽引／追従」「生徒／先生」「意見調整」「ボケ／ツッコミ」「辞書引き」など、さまざまな社会的役割を演じつつ、きわめて流動的で複雑な、意味のある探究活動をしているということである。周知のとおり、一般的な教室談話、とくに、教師主導型の授業では、典型的なIRE構造（Initiation【教師の質問】→Response【生徒の応答】→Evaluation【教師の評価】）が多く観察されるため、学習者が多くの意見を交換し思考を深める機会が圧倒的

に少ない（第6章5節の教室エスノグラフィーによる補足調査を参照されたい）。しかし協働学習ではQR構造（Question【生徒の質問】→Response【生徒の応答】）が多く、Rの部分が広がりをもせることが確認された。著者の鋭い洞察によって、生徒たちが内的説得力をもつ言葉で理解のプロセスを話し合いながら、学びの面白さを体験する様子が緻密に描き出されている。最終章である第7章では、それまでの議論が整理／総括され、研究の限界性や今後の展望が述べられている。

以上、本書の構成と内容について素描した。さて、ここからは、評者の解釈を織り交ぜながら、本書が読者に読まれることによって期待される社会的効果について考えてみたい。日本の英語教育界では「英語が使える日本人」、「自ら積極的に学ぶ意欲」、「自己表現／評価」などの鍵語が飛び交っているが、著者も指摘しているように、これらは断片化／孤立化した個人（の側面）ばかりに焦点化している。教育に関する多元的な実態や、相互作用的な過程を看過した見方は、「自己責任」と「成果主義」を基調とする新自由主義のイデオロギーと共鳴し、社会的な「正当性」を獲得する様相を呈している。だが、このような傾向が強まると教育格差が拡大し、マクロ・メタ的視点をもつ自律的学習者が育たなくなることが、あまり認識されていないきらいがある。本書は、このような現況に警鐘を鳴らし、個別／競争学習、習熟度別学習、教師主導型の一斉授業に代わる選択肢として、学習者の連帯性を強めながら意識を社会化する協働学習の可能性を考究し、その効果を実証的に示している。本書でふれられているように、かつてバフチンなどの思想家たちが、揺れ動く時代の波に翻弄される個人の力の可能性に限界を感じて、個人と個人の関係性（つながり）に着想を得て独自の思想体系を築き上げたのと正に同じように、著者の問題関心と研究姿勢が、先述した現代の教育界に対峙する「挑戦」と位置づけられ、新たな教育実践の方向性を提示し、読者の思考の幅を広げてくれる。

著者は、協働学習を導入するに当たって「教師の果たす役割」について言及しており、相互行為の「質」の重要性を挙げている。現代の学校教育では、あらゆる側面で効率性や合理性が優先され、知識／情報／技術の「量」が重視されがちだが、学習者の自律性やメタ的（批判的）視点を高めるには、教育に対するまなざしを「量」から「質」へ転換すべきである（p. 291）、という著者の主張はたいへん興味深い。教師は学習を単なる「情報伝達の間」ととらえるのではなく、参加者たちの相互行為で創出する「学び合いの場」とみなすことが必要であろう。もちろん、教育における「質」が重要であることは、「量」が重要でないことを意味しない。著者自身、「協働学習はすべての学習に対して効果があるわけではないこと、つまり、知識の獲得には従来の教師主導型学習の方が効率的であり、その後、獲得した知識を定着させ、思考を深めるのには仲間との協働学習が有効であるとの主張が読み取れる。」（p. 59）と述べている。以上のことから、教師の役割と責任がこれまで以上に大きくなっていることに気づかされる。英語の知識や技術の習得のみならず、学習者の自律的態の涵養とマクロなメタ的視点の獲得を目指した教室での実践と、学習者同士のコミュニケーション過程を重視した授業づくりが求められているのだ。

著者は、教師自身が「マクロ・レベルのメタ認知を働かせること」の大切さも説いている（p. 291）。自律的な学習者の育成には、まず何よりも、教える側がクリティカルな視点を担保していなければならないことは言うまでもない。一般的に言って、教師は職業柄、自己の判断を絶対視して、学習者がその規範に合わせることを当然視しがちである。その結果、「権力者／抑圧者」と化し、自文化中心主義的な「オレ流／アタシ流」の教育論—つまり、著者の言葉でいうならば「権威的な声」—によって教室ディスコースを統制、あるいは、学習者全員を管理／支配できる（すべき）と錯覚し、彼ら彼女らと対等な立場で学ぶ謙虚な姿勢を喪失してしまうことがある。著者

は自律性を、「効果的に学ぶために自ら学習を管理できる能力である」(p. 40)と定義づけ、「権威や狭い自己から解放され、批判的視点をもって学習に関わることの出来る社会化された存在であること」(p. 76)をその要件として付言している。英語教師は、授業を学習者と協働で創り上げる社会的なコミュニケーションの場ととらえ、自らもその出来事の中に位置づけられてゆく間主観的な存在であると認識し、著者のように、自己の規範や解釈を突き放して観察・分析できるような批判的な視点、自己再帰的な意識をもちながら、日々の教育活動に従事してゆくことが肝要であろう。本書はその案内役として、読者に今後の道筋を照射してくれる。

最後に、著者とは、院生時代の縁を機に、修了後もさまざまな教育プログラムで協力をお願いすることがあるので、プライベートな側面についてふれさせてもらいたい。「あとがき」に書いているように、津田氏のこれまでの教育活動と研究活動は、自己アイデンティティの確立と自律を目指す「格闘」であったと推察する。氏自身が、生活者として、教育者として、そして自律的な学習者として、他者と共に学び続ける広い経験をしてきたからこそ、本書が誕生したにちがいない。学びの質を追究しながら、協働学習の在り方を、身をもって指し示した著者に敬意を表するとともに、この本が多くの人に読まれることを願いたい。